

平成26年度研究協議会資料

都道府県・ 指定都市番号	1	都道府県・ 指定都市名	北海道	研究課題番号・校種名	2 中学校
				教科名	保健体育
研究課題	<p>◇体育分野と保健分野の両方を取り組むものとする</p> <p><b>【体育分野】</b></p> <p>○今回の中学校学習指導要領保健体育の改訂の重点である指導内容の明確化（中学校学習指導要領解説保健体育編 p9）を踏まえ、指導が難しいとされる下記の②についての研究</p> <p>②運動を合理的に実践するため、運動の技能や知識を活用するなどの思考力・判断力を育成するための指導や評価方法等の工夫改善についての研究</p> <p><b>【保健分野】</b></p> <p>○個人生活における健康課題を把握し、その解決を目指して具体的に考え、判断し、それらを表現する力の育成を図り、以下の単元における「知識を活用する学習活動を取り入れる指導方法の工夫」のための具体的な指導方法等の研究開発</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1学年の「(1)心身の機能の発達と心の健康」</li> <li>・第2学年の「(3)傷害の防止」</li> <li>・第3学年の「(4)健康な生活と疾病の予防」</li> </ul>				
ふりがな 学校名（生徒数）	ほっかいどうきょういくだいがくふぞくさっぽろちゅうがっこう 北海道教育大学附属札幌中学校（359人）				
所在地（電話番号）	北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1-11				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<a href="http://www.hue-fsj.ed.jp/study/2012/05/post-1.html">http://www.hue-fsj.ed.jp/study/2012/05/post-1.html</a>				
研究のキーワード	「学びの主体者となる生徒」 「問い」 「問う」 「学び合い」				
研究成果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒自らが「問い」を生むことで学びに対する意欲を高めるだけではなく、「問い」を解決するための方法や検討し、探究する活動を通して、研究課題である思考力・判断力等を高めることができた。</li> <li>・「問い」を解決するための方法を検討し、探究するために、他者に「問う」ことにより、複眼的な視点で検討することができ、研究課題である思考力・判断力等を高めることに寄与した。</li> </ul>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

「学びの主体者」となる生徒の育成 — 「問い」を活かす授業の探究—

(2) 研究主題設定の理由

知識基盤社会の到来，グローバル化の進展，変化の著しい社会には「生きる力」が必要であり，いかなる環境においても，自分の考えをもつこと，そして，自ら判断し行動することが求められている。学校生活において，これらを身に付けた具体的な姿とは，異なる意見や多様な考えを聞いたときに，相手の意見を受け入れたり，自分の考えを変えたりまとめたりすることができる姿，自分の考えも含めて批判的，客観的に見ることができ，自分が夢中になっているときに，冷静になれるような意見を言える姿，また，話し合いの内容がある一点にばかり目を向けられているときにその全体を客観的に捉えることができる姿といえる。こうした生徒を育てていきたいという願いや，集団に埋もれ個を生かすことができずにいる生徒が多いという本校生徒の実態から，集団と個における関係性を踏まえ，研究主題を『「学びの主体者」となる生徒の育成』と設定した。

### (3) 研究体制

- |                                     |                 |
|-------------------------------------|-----------------|
| ・本校全教員出席による会議にての研究討議（週1回）           | ・本校研究部との連携（月2回） |
| ・札幌市学校体育研究連盟の中学ブロック研究会議での学習案検討（月2回） |                 |
| ・大学教員との連携、及び、指導検討会の実施（月2回）          |                 |

### (4) 1年間の主な取組

平成26年度	06月17日	札幌市教育研究推進事業研究集会にて研究実践発表	
	07月28日	教育研究大会にて保健分野の公開授業	【森調査官訪問】
	10月07日	札幌市教育研究推進事業研究集会にて研究実践発表	
	10月17日	公開研究授業にて体育分野・保健分野の公開授業	【高橋調査官，森調査官訪問】
	11月10日	校内研究授業にて体育分野の公開授業	

## 2 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 研究内容

研究主題である『学びの主体者』となる生徒を「自らの思考・判断をもとに、自他に働きかける生徒」および「他者との関わりを通して、自分自身を客観的に捉え、成長に向かうことができる生徒」とした。この『学びの主体者』となる生徒の育成に向け、研究仮説を「生徒自らが「問い」を生み、「問う」ことの価値を実感する学び合いによって、『学びの主体者』となる生徒を育成することができる。」と設定した。本校では、「問い」を、これまでの自分の認識や経験の違いから生じた疑問のうち、解決したいと強く思うものとし、「問う」を「問い」を解決するために他者に働きかける行為と定義した。「問う」行為は、対話や協議などにより言語活動を充実させ、思考力・判断力等の育成を目指すものでもある。

### (2) 具体的な研究活動

思考・判断に関する指導内容は、体育分野においては、課題に応じた運動の取り組み方を工夫することであり、保健分野では、健康課題の解決に向けた科学的な思考と正しい判断の下の意志決定や行動の選択である。これらの指導内容から、生徒の思考力・判断力等を育成するための指導や評価方法として、本研究では「問い」と「問う」を設定した。「問う」は「問い」により成立し、他者に自らの考えを「問う」ことによって、より具体的に、より適切に課題解決の在り方を探究することになり、保健体育科の目標に迫るための一助となる。「問う」は「問い」の解決を目指し、習得した知識や技能を活用して仮説や解決の方法を考え、課題解決を通して新たな「問い」を生むことになる。これらを踏まえ、思考力・判断力等を育成する指導や評価方法として、主な研究の視点を以下の通りに設定し、研究実践を進めた。

#### A 生徒自らが「問い」を生む手立て

- ①【体育分野】【保健分野】 既成概念を確かめる学びの重視
- ②【体育分野】 「やりたい」のに「できない」から「問い」を生む授業の展開
- ③【体育分野】 「条件や状況が変わる」と「できない」から「問い」を生む授業の展開

#### B 「問う」ことの価値の実感をもたらす手立て

【体育分野】【保健分野】「問い」を解決するための自らの「仮説」の設定と検証の重視

## 3 研究の成果と課題

### (1) 成果

#### A 生徒自らが「問い」を生む手立て

##### ①【体育分野】【保健分野】 既成概念を確かめる学びの展開

生徒の既成概念を教師が改めて確かめることで、明らかにしたい内容の本質に迫り、「問い」を生む

手立てとした。生徒が何となく認識していた内容に対して、正しい認識なのかを吟味したり、具体的な根拠を示したりすることで、「本当はどうしたらよいのだろうか」「具体的な方法はどのようなものだろうか」などといった「問い」を生むことができる。

### 第2学年 保健分野 (3) 傷害の防止 ウ 自然災害による傷害の防止

前時で学んだ地震や二次災害の様々な状況と、複雑な周りの環境の整理から、傷害を防止するための行動や避難の方法を選択したり、説明したりすることを本時の目標とし、思考力・判断力等の育成を目指した。そのため、本時において生徒自らが生む「問い」を「大地震の際、どのようにしたら自分の身を守ることができるか」と設定した。この「問い」を生むために、「地震発生時に家屋の倒壊や家具の落下に備えて、机などの下に避難する」という既成概念を確かめることとした。もちろんこの行動を否定するものではないが、壁や柱が崩壊し天井が落下するほどの大地震では、確実に身を守ることはできない。それよりも、強度の高い家具やソファの真横にうずくまって避難する方が生存率は高い。いわゆる「三角形の救命スポット」の提示である。また、ドアや窓がある壁は崩れやすく、避難口を確保するために安易に移動することは危険な行動の一つである。このように、状況によって行動の是非が異なることを確かめることにより、生徒自らが「問い」を生むことができた。その後、大地震の発生を想定し、学校内から避難するケーススタディを用い、傷害を防止するための行動や避難の在り方を検討する活動から、地震や二次災害による傷害の防止には、傷害の原因と内容を想定し、避難経路の状況を的確に判断した行動が必要だという解決の姿を見出すことができた。

### ②【体育分野】 「やりたい」のに「できない」から「問い」を生む授業の展開

「新たな技に挑戦したいがどうしたらよいか?」「うまく動きが仲間と合わない。なぜ、うまくできないか?」などという「やりたい」のに「できない」から、「問い」を生むこととした。この手立てにおける大切な視点は、教師による価値付けである。教師による価値付けは、生徒が実物に触れたり、見本を直接観察したりすることで、「できると格好いいな!」「複雑な動きや事象を整理するとすっきりするぞ!」というような憧れを抱くことができる。この憧れがもととなり、「このままではできないぞ! どうしたらよいか?」「どんな方法が考えられるだろうか?」という「問い」を生むことができる。

### 第2学年 体づくり運動「体力を高める運動」 ダブルダッチ（巧みな動きを高めるための運動）

縄の動きに対応してタイミングよく動く運動から、自分の理想とする跳び方に応じた運動の行い方を工夫することを本時の目標とし、思考力・判断力等の育成を目指した。そのため、本時において生徒自らが生む「問い」を「なぜ〇〇のような入り方ができるのだろうか?」と設定した。この「問い」を生徒自らが生むために、「やってみよう!」けれど「できない」という状況を設定した。生徒が「〇〇のように跳んでみたい!」という理想とする姿を描くために、側方倒立回転やサイドステップから縄の中へ入る見本から価値付けを行った。この価値づけは生徒の強い憧れとともに、自ら「問い」を生むことができた。「問い」の解決に向け、今までに身に付けた技能や知識を活かすことができるのか、新たな考え方が必要ではないか、検討する活動により、タイミングの取り方は生徒で異なるとしても、どんな入り方であっても、迎え縄の位置に自分の動きを合わせ、リズムを取る工夫が必要だという解決の姿を見出すことができた。

### ③【体育分野】 「条件や状況が変わる」と「できない」から「問い」を生む授業の展開

いつもの条件や状況が変わることにより、今までに身に付けた知識や技能を發揮できないことがある。「今までできたのに、〇〇ではうまくいかないけど、どうしたらよいただろうか?」「〇〇は、この場合

にしか使えないのかな？」という「問い」である。練習の場面などにおいては、限定された条件や状況が確保されているため、この「問い」を感じることは少ない。状況の変化を意図的に組み込むことや、いつも異なる状況を明確に捉えることで、生徒自らが「問い」を生むことができる。

## 第2学年 武道・柔道 「相手の動きに応じた体落とし」

「取」は、重心を左足に移す「受」の動きに応じて、体落としに必要な動き（進退動作、崩しと体さばき）を工夫することを本時の目標とし、思考力・判断力等の育成を目指した。そのため、本時における生徒自らが生む「問い」を、「左足に重心がある相手に体落としをかけるにはどうしたらよいか」と設定した。この「問い」を生む手立てとして、「条件や状況が変わる」と「できない」から「問い」を生む授業を展開した。これまで投げ技の学習においては、基本となる技の習得のために、「取」は「受」の崩しに応じるという全面的な協力を得て技の精度を高めてきた。しかし、本時においては、「受」が初めて協力しない状態を経験する。具体的には、体落としの技のかけの瞬間に、「受」が崩しに協力せず、右足を後ろへ下げるという条件を示した。この状況が「条件や状況が変わる」ことである。この「受」の動きは、自由練習やごく簡単な試合など、互いに組み合って技を掛け合う柔道の特質を考えると、柔道の本来の動きとなる。しかし、生徒はこのような相手の動きに応じた動きは、投げ技においてこれまでには全く経験していない。これまで自信をもって取組んできた技が、条件が変わることでできなくなった状況から、右足に重心を移動させ、体落としをかけるための動きの工夫の仕方を探究することとなる。探究活動の結果、自らの進退動作により、真後ろや左後ろ隅に崩し、相手が体勢を立て直す動きに合わせて、体さばきを行うことが必要だという解決の姿を見出すことができた。

## B 「問う」ことの価値の実感をもたらす手立て

### 【体育分野】【保健分野】「問い」を解決するための自らの「仮説」の設定と検証の重視

「問い」を解決するために生徒一人一人が、自らの「仮説」を設定することとした。「問う」ことの価値を実感するために、「自ら」という視点を大切にしたい。これまで、グループ学習において、「問い」を解決する方法を模索するとき、他者の考えに同調し、適切な方法なのかも吟味せずに、他者の考えを鵜呑みにして活動する姿も多く見られた。自らの考えや判断を大切にすることにより、「問い」を解決する過程を明らかにすることとした。「〇〇すればよいのではないだろうか？」「△△で動いてみよう！」という予想を「問い」を解決するための仮説とした。生徒が設定した「〇〇をすると、△△ができるのではないだろうか」という仮説は、他者との交流から、解決の可能性を高めたり、手立ての幅を広げたりすることができる。生徒が立てた仮説の探究は、課題の解決を導き、本時の目標（思考力・判断力等の育成）の達成へとつなげることができた。

#### (2) 課題

思考力・判断力等の育成のために「問い」の設定とその解決の授業展開を手立てとしたが、「問い」の解決のための手段として、これまで身に付けた知識や技能を活用することが必要である。その活用場を設定しなければ、解決の方法を何も無いところから創造的に生み出すことになり、思考力・判断力等の育成につながらない。解決の方法を検討するために、生徒が選択できる内容や方法を示したり、これまでの学びと関連付けたりする場の設定などの手立てを講じていくことが必要である。

#### (3) 指定期間終了後の取組

- ①平成27年06月16日（火）札幌市教育研究推進事業保健体育部会において研究授業を行う。
- ②平成27年07月27日（月）北海道教育大学附属札幌中学校教育研究大会において研究授業を行う。
- ③平成27年10月16日（金）学校体育研究連盟北海道大会において研究発表を行う。